

「仕事満足度」120%マガジン
PHP BUSINESS
THE 21

「仕事ができる人」が実践している
戦略的⑨ノート術を一挙紹介!



各界の
ノートの
達人が
大集合

ざ・にじゅういち

03

2010
No.304 PHP INSTITUTE
定価550円

インスタントラーメンの発明者を父にもつ
日清食品HD社長の新成長戦略とは?
安藤宏基の「ハングリーの哲学」



トップ取材

平成22年2月10日発行 毎月1回10日発行 第27巻第3号 昭和60年1月22日第三種郵便物認可

総力特集

「仕事ができる人」は ノートに何を 書いているのか?

1冊のノートで
あなたの仕事
ガラリと
変わる!

些細な情報を仕事の成果に結びつける
"超一流"の戦略的ノート術!



特集

"ついダラダラと仕事を続けてしまう"あなたへ!!
読むだけですぐに帰りたくなる
「残業セラピー」

PROFESSIONAL INTERVIEW

俳優
藤原竜也

女優
中谷美紀

東京大学大学院教授
ロバート・キャンベル

リーマン・ショックから1年半——。その震源地のいまは？
NYに暮らす日本人の生き方&働き方はどう変わったか？

「日本人ニュー Yorker」の ポジティブ仕事術



写真・取材・文 佐藤智子

節約はカッコいい！ これがNYの新価値観

ニューヨークは想像以上の不況だった。マンハッタンは空きビルが目立ち、かつてのきらびやかさは見る影もない。右を向いても左を向いても、リーマン・ショックの傷跡は色濃く残っていた。それなのに、人びとの悲壮感是不思議なことにそれほどでもない。悲観しても何も始まらないことをこの街は知っている。そんなタフな街に住む4人の日本人たち。彼らは日本的な冷静さと真面目さをもちながら、アメリカ的な前向きさと大胆さをも兼ね備えていた。

リーマン・ショックから一年以上が経った昨年末。華やかなはずのニューヨーク（以下、NY）の街並みは、その様相を変えていた。クリスマス・シーズンが始まったというのに、イルミネーションは思いのほか地味で、道行く人びとも明らかに観光客とわかる。ニューヨークは夜の街にも週末にもあまりみかけない。五番街の目抜き通りさえ、「For Rent」と書かれたビルが点在。こうした変化に、NY在住二十二年の板越ジョージさんは、「不況？ 僕は予測できていましたよ。だから、リーマン・ショックの半年前から準備していました」という。

板越さんはフリーペーパー制

作、雑貨ショップ経営、起業コンサルティングなど、さまざまなビジネスを手がける実業家。その経験で早くから異変を感じ取っていた。「まず、突然、フリーペーパーの広告出稿が減ったんです。また、創業何十年という格式あるレストランが、二〇〇七年後半くらいから四、五軒潰れはじめた。どれも、「この店が潰れるなんてあり得ない」というようなお店。これはヤバイなと思いましたね」

次なる余波は小売業に。雑貨の売上げがどんどん下がっていく。そこですぐに手を打った。まず雑貨の卸しを切って売上げの三割を自ら減らし、さらには営業・販促部門を思いきってなくしたという。「とにかく、こういうときは売上げを無理に上げる努力はしないこと。その代わり、出費は徹底的に抑えました。電話やインターネットの契約を安く交渉し直したりして、経費を約二〇%削りましたね」

しかし、社員のリストラはせず、給料も減額しなかった。いまは踏ん張るときと覚悟を決めた半年後、リーマン・ショックは起こった。板越さん自身は、一九九五年にニュージャーシーに家を購入し、二〇〇四年に売却。「購入価格の三倍の値で売れた」という、住宅バブルの恩恵を受けたほうだが、それでも不況の波には逆らえない。「僕自身も、二〇〇八年からライフスタイルを変えましたよ。マンハッタンの高級アパートを引き払

い、目の前が海というロッカウェイビーチに引っ越しました。以前は夜な夜なパーティー三昧。仕事も二十四時間呼び出されてタクシード向かうアグレッシブな毎日。でもいまは、ヘルシーフードを家でつくって、波の音を聞きながらゆったり。マンハッタンまで電車で四十五分かかるけど、打ち合わせ以外、週四日は自宅で仕事をしています。家も広くなりました。しかも生活費は三分の一。違う意味でのリッチを手に入れましたね」

不況だから仕方なく郊外に——。そんなマイナスイメージでニューヨークは動かない。いままでの生活を見直して、新たなライフスタイルに。かといって、ダウングレードはイヤ。より心地のよい、より快適な暮らしへ、人びとの意識が変化しはじめた。

それを裏づけるように、NYでは週末などにお金を使わず、いかに「Freebie（無料のもの）」を楽しむかという価値観をもった人たちが急増している。彼らは、無料イベントに参加したり、美術館やギャラリーの無料開放に出か





なかなか値段を下げないニューヨークでも、ついここまでのブライスタウン。ある店に入ると、「ウチはこんな値段で売ってる店ではないの。今回のセールは特別なのよ。この革のバックは自信作なの。もし汚れたら、いつでももってきて。すぐにクリーンするわ。アフターケアはちゃんとするわよ」と。ホスピタリティというかたちで、店のプライドを保っていた

ミッドタウンでもソーホーでも、街の至るところに空きビルが……。ブランド品でゴージャスに着飾ったニューヨーカーは、もはや過去のもの。元氣よく買い物をするのは、中国人をはじめとする、海外からきた観光客ばかり。マンハッタンは物価が高くて住みづらいいと、郊外や地方に引っ越す人も多い。そうした人のなかには、ゆっくりとした時間を過ごす新たな生き方に目覚めた人も



レストランでの食事はチップ代もかかると敬遠され、宅配サービスを利用してオフィス内でランチをとる人が急増。ウォール街のある通りでは、10軒中4軒の老舗レストランが、去年1年で潰れたという。街には、Vender(屋台)があふれ、行列ができていた、なかでも人気は、「Falafel」というアラブ系フード。ミートボールに見立てた野菜コロッケなど、安くて健康的だと評判



店が潰れた有名シェフが出店した屋台も。とはいえ、そこには「仕方なく」という切迫感はない。むしろ、「どんな状況でも、技術や腕さえあれば、自分の味を提供することはできるんだ」という自信やプライドのようなものを感じた

けたりするのを好む。この流れは、アッパーな人びとも浸透しつつあり、「贅沢はカッコ悪い、節約するのがクール」という意識は確実に広がってきているようだ。

たとえこんな時代でも売れるモノは売れる

「たしかに以前は、節約はケチという感じで嫌われていましたが、いまは賢いイメージ。みんな、クーポンなどをうまく使っていますね。それに謙虚になった気がします。仕事があるだけありがたいというか……」

そう語るの、菅野真千さん。渡米十七年。新聞記者助手を経て、現在はビジネス通信、マーケティング、プロモーションなどを手がける会社を経営している。

「リーマン・ショックの直前の〇八年八月に出産をしました。それで、〇七年からちょうど事業を縮小しようとしていたんです。そういう意味では私はラッキーでした。でも、社会状況はたしかに厳しくなったと思います。私自身、以前はミッドタウンに住んでいて、外食も週三回くらい。クライアントをブロードウェイに連れていって、四ツ星レストランで一人百ドル以上かけて接待したり、勉強会やその資料代に一回五十〜百ドル使うのも当たり前でした。ほんとうに惜しみなく使っていましたね」

でもいまは賢く使う。外食は月に一、二回。食材の衝動買いを避

けるため、宅配サービスでこだわりのオーガニック食材を購入。ムダをやめ、そのぶんかけるところにはかける。

「郊外のブルックリンに引っ越して、広さは三倍、空気もよく、家族の時間も増えた。働き方や生活の仕方が変わりましたね」

二十四時まで仕事をしていたサイクルをやめて、十八時をリミットに。家族三人で月八百ドル払っていた医療保険料も百五十ドルに縮小(それにともない保険会社の負担は全額から三割に)。そのため、チーズ二枚を一枚にするなど、これまで以上に健康に気を遣うよ

「焦って何かするでもなく、ただ寝て待つでもない。悪いときには悪いときなりのやり方がある」



板越ジョージさん(41歳)

実業家

1988年、アルバイトで貯めた100万円を資金に渡米。95年にITASHO Americaを設立。現在は、出版、広告、小売り、コンサルタント業など、さまざまな事業を手がけている。著書に、「リベンジ人生道場」(扶桑社)など多数。フリーペーパー「アメリカンドリーム」の発行、NY異業種交流会の主催など、幅広く活躍。また現在、月に1回来日し、中央大学大学院でMBAを取得中。

<http://amedori.exblog.jp/>

うにもなり、「節約ができて健康にもなれた。まさに一石二鳥」と笑う。

「ベビーシッターも不況で、以前は時給十五ドルが相場だったのに、ありがたいことにいまは一日三十ドル。これからの時代は、もっているものでVIP扱いされるのではなく、独自のライフスタイルをもっていることこそがステイタスになると思います」

こんな時代でも売れるモノは売れるし、おいしい店は流行る。エコビジネスのように伸びる業界も、儲ける人もいて、すべてはアイデアと行動力次第。菅野さんは情報収集を欠かさず、ネットで話題のサイトや見本市をつねにチェックし、発想力を刺激しているという。

「それと、何があってもブレない、環境に影響されない強さをもたないです」



「お金は賢く使う。幅広く情報収集し、優先順位を決めてチョイス。自分の価値観をもつことが大事」

菅野真千さん(35歳)

マーケティング会社経営

ジョージ・ワシントン大学卒業後、中日新聞社ワシントン総局に入社。その後、ニューヨークに移住。現在、日米企業のプロモーションやマーケティングを手がけるAISAP Inc.を経営する。家族は、日本人の夫と1歳半の娘。ニューヨークのビジネス情報を定期的に配信中。

<http://aisaptimes.com>

悲観しすぎる日本人にはない 前向きさとタフさとプライド

クルマを手離して電車や自転車通勤に、紙コップをマグカップに、ハードカバーよりペーパーバック、書店より図書館を利用という人が増えている。その一方で、安いハンバーガーより高価なローフード(「ロー＝Raw」とは「生」の意味。その名のとおり、食材をできるだけ生に近い状態で食べる食事のこと)を選んだり、NYも変わってきた。

そんなニュー Yorker の変化をひしひしと感じるというのは、内藤博久さん。大学時代から渡米し、現在は弁護士として活動している。「とにかく、ウォール街に人がいなくなりました。一時期は、段ボール箱を抱えたり、キャリアバッグを引きずる人たちが地下鉄でもよく見かけましたよ(リストラさ

れて自分の荷物を運ぶ姿)。レストラン数も激減しましたね」

三ドルの屋台ランチには長蛇の列ができ、オフィスにお弁当を持参する人まで出てきた。また、人が減ったぶん、一人当たりの仕事量の負担は増え、時間的余裕もなくなった。五ドルもしないケバブとドリンクセットをオフィスに持ち帰り、それだけで一日を乗り切るうとする人も少なからずいる。

内藤さんがウォール街に事務所を立ち上げたのが、〇八年の五月。「不運というべきか、大打撃でしたよ(笑)。でも、考えようによつては、直前でよかったのかも。たぶんいまだつたら絶対に独立してない。いや、できないでしょうね」

この事態を逆に好機と内藤さんは考えた。いまや、ハーバードの弁護士がスタバでバイトする時代。多くが失業していくなかで生き残るには、新たな戦略が必要だ。「弁護士の仕事は、費用をデイスカウトしても、クオリティを落とすことはできない。つまりは割引ができない仕事。だったら、サービスを変えて時間や経費を節約する方法がある。一般の人はなんでもかんでも弁護士に頼るといふ場合が多い。そこで無料セミナーを開いて、法律の基礎をまず学んでもらう。つまり、負担と責任を顧客とシェアしていく。すべてを請け負うのではなく、ここまで指導するので自分でやってください」というふうな。これだと、こ

「不況はみんなにふりかかったこと。自分だけに起こったことではないし、自分だけがツライわけでもない」



内藤博久さん(35歳)

ニューヨーク州弁護士

ロッチェスター大学卒業後、Washington College of Law で J.D. プログラムを卒業。現在、設立90周年のNY法律事務所「Moses & Singer LLP」で日系企業をサポートを行なっている。ブランド保護、不正競争防止法などを専門とし、知的財産権の権利行使、知財ポートフォリオやパブリシティ権の管理が主な業務。米国進出をめざすアーティストやスポーツ選手のサポート業務も手がけている。

小売店にしても、「いままで百ドルで売っていたものを半額で売らないうつた店を閉めて、景気が回復してからまた店を開けばいい」、そんな潔さをもったところが多い。日本のように、どこもかしこも「お願いです、買ってください」とする気持ちで値下げに走ることはないのだ。

バブル崩壊を経験したから 今回の金融危機も予測できた

自主性が重視される社会では、前向きでいることが何よりの景気回復術だ。悲観しすぎたり、いじけた気分では生きていけない。

「不況だからどうか、レイオフされたらどうしようとか、ネガティブなことをいわない、暗いニュースばかりを追わないのがニュー Yorker です。世界一、自意識が高い。不景気だからこそ動いてチャンスをつかもう、なんです」



シラクサさおりさんはアメリカの大学を卒業して、ワールドトレードセンター内の金融会社に就職。そのわずか半年後に、あの事件に巻き込まれた。あと一本早い地下鉄に乗っていたら、いまの私はいなかっただろうとさおりさんはいう。そんなツライ経験にしても、NYを離れるどころか、この地で自分のやりたい夢を叶えている。「テロのあとに、ニューヨーク市長がみんなに呼びかけたんです。『笑うことは罪じゃないよ。さあ、こういうときこそ、前を向いて顔をあげて街に出よう。それがテロに屈しないという姿勢なんだ』と」さおりさんは、かねてから金融

「楽観的すぎるのもよくないが、日本人は落ち込みすぎ。もっと顔を上げて視野を広げるべき」



シラクサさおりさん(31歳)

市場アナリスト

ニュージャージー州の大学を卒業後、2001年にニューヨークの日系金融企業に就職し、9.11を経験。現在、東海東京証券アメリカで、市場アナリストとして、米国経済や株式市場の動向を追っている。日経CNBCにも出演。2006年、アメリカ人と結婚。

業界の表舞台でマーケット・アナリストとして働きたいと思っていた。そのチャンスがやってきたのは〇八年七月。リーマン・ショックの二カ月前の採用話。てっきり無効になるかと思いきや、十一月に転職が決定。現状維持より新天地をめざしてチャレンジした。さおりさんもまた、強運を引き寄せる力があるといっている。〇四年に買った家を〇六年に五万ドル近く高く売り、マンハッタンまで一時間半かかる郊外に新たな家を購入した。夫と二人、快適な暮らしに満足しているという。「サブプライムローンが崩壊することは予測していました。『この景気は、日本がかつて経験したまさにバブルと同じなんだよ』と夫に話して、早めに家を売りに出したのが正解でした。周りにも警告しましたが、不吉なことをいうなという感じで、みんな浮かれている

不況はしばらく続くでも対処法はある

たのはたしか。投資のために安く家を買って、改築して少しでも価値を上げようと必死で。でもそんなうまい話があるわけじゃないです」先を読む冷静な判断で、危機を免れたさおりさんはつねに前向き。「自分をどう活かして、どこに飛躍していくのか、求められているものを把握することですね。過去にしがみつくとより、新しいワールドに向かうべき。頭を下げていると何もみえなくなるけど、頭を上げると視野が広がりますよ」

不況の風は厳しくても、活気はあるNY。ストリート・アーティストが集まるソーホーで、段ボールや新聞紙にペインティングしている作品をみた。不況なら不況なアイデアから刺激を受ける街。「情報は街で得るんです。銀行の窓口には並びながら会話を交わす。『マネー・マネー・マネー、いくら預金があるかで態度が変わるのよ。三十年近くも長くつき合っているのに、四行目の合併でこのサマよ』。次々と変わる担当者に嫌気がさしたというおぼろげの言葉に、銀行の信用もガタ落ちなんだなと気づかされた」と板越さんはいう。「不況はもうしばらく続くかと思えますよ。もっと底があるかもしれない。でも対処法はあります」

まず、あまりニュースに翻弄されないこと。自分の周りで起こっていることをみて、冷静に判断すること。シリウスになりすぎたり、人目を気にしすぎたりしないこと。次に、働き方やビジネス環境、意識を変える。無理に焦ってガツガツするのではなく、底を打つのを待つくらいの姿勢で。経費を使う余計な動きやリスクの高いものは避けて来るべき時に備える。

「何があっても失われない財産といえるのが、知識と人脈と健康です。だから、こういうときは勉強をしたり、人に会ったり、身体に気をつけたりする。僕たちは九一一で、生きているだけでいいというのを経験しました。だからこそ、どうやって生きていけるかと信じています」

どんなに不況でも、自殺する選択をしないのが、アメリカ、NYだ。ここが、日本と大きく違う。「もし、ドラマ『セックス・アンド・ザ・シティ』の新シーズンが始まったなら、状況は一変しているでしょうね。キャリアは連載を打ち切られ、友達は仕事がなくなっているかもしれない。でも、ライフスタイルを変えたり、意識を変えたりすることで、新しいリッチを味わうことはできる」と板越さん。NYはまさに新たな変換期。その変化の波のいくつかは近い将来、日本にもやってくる。ここで紹介した四人の話から学べることは、決して少なくないはずだ。